

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0545 ◆◆◆

19/08/07

【 7 月小動きの反動も!? 8 月は「大相場」か 】

当レターで「動くか動かないか両極端」ーとレポートした7月相場だったが、結局今年は「動かない」年だった。月間を通した変動幅はわずかに1.79円にとどまり、これは今年2番目の小変動となる(1位は4月の1.61円)。

しかし、そんな7月を終えた途端、8月1日はまるで憑き物でも落ちたかのような荒れ模様。たった一日で7月の月間変動を超える2円以上も動いた。2ヵ月連続の小動きだっただけに、「8月こそは!」と期待をかける参加者も少なくなく、そうした視点で見た場合には幸先の良いスタートが切れたと言えるのかもしれない。この先の変動にも是非とも期待している。

◎「円高有利」はドル/円に限らずクロス全般に適用、「全面高」も!?

当レターの恒例となっている、経験則をもとにした8月の月間相場予測を以下で考えてみたい。まず星取表はというと、1990年以降昨年までの29年間で11勝18敗、「円高有利」の状況となっている。すでにこうした経験則は、7月30日付の日経新聞で『8月は円高』、迫る包囲網」と報じられるほどメジャーになっているが、実際、8月の声を聞いた途端、相場が大きくドル安・円高に振れるなど、取り敢えず経験則通りの展開だ。まだ、断定するのは当然早いものの、やはり今年の8月相場も「円高有利だった」ーという結論で終了することになるのかもしれない。

また、そうした「円高有利」な状況はドル/円に限ったことではなく、一部のクロス円についても見て取れる。実例としてユーロ/円を挙げると、2007年以降2011年までの5年連続を始め、2000年以降の19年間では実に13回も円高が進行していた。率に換算すると、ドル/円よりも一部クロスで円高に振れる確率の方が高い。

いずれにしても、8月相場は単純に「ドル/円において円高有利」というだけでなく、むしろ「クロスを含めた円全面高の展開に要注意」と言った方が正しいようだ。

そんな、円高有利な8月相場には、もうひとつの特徴がある。それは、先7月と同様に「動くか動かないか値動きが両極端」ーであるということ。

実際、ここ数年の事例をみると、2015年は「動いた」年の典型で、月間変動幅9.13円となり、同年でもっとも動いた月だった。対して、翌2016年は同3.99円で11位、2017年は同2.78円で10位、昨2018年は同2.37円で10位ーにとどまっている。つまり、直近は3年連続で「動かなかった」年だったわけだ。

翻り、今年はというと、ここまでですでに月間変動幅が3.8円ほどとなっており、また今後の動意も期待されている。とすれば、「動かなかった」年になる公算は低く、むしろ「動く」年に対する警戒感が必要である気もするが、果たして如何なる結果となるのか今後の動きに注目したい。

一方、相場そのものの特徴というわけではないが、過去の8月を調べてみたところ、為替や金融に関する重要な事象が起こることが少なくない。一例を挙げると、「ニクソンショック(1971年)」「EMSの通貨調整(1993年)」「ドル/円が100.40円の当時最安値を記録(1993年)」「ドル/円が147.64円のドル戻り高値示現(1998年)」「ルーブル危機(1998年)」「1995年記録のドル最安値79.75円を初めて下回る(2011年)」ーなどとなる。

もちろん、こうした事象は毎年確実に起こるものではない。しかし、今年も考えてみれば、「中国人民元が対ドルで下落し、2008年以来約10年ぶりの1ドル=7元台示現」や「人民元がオフショア市場で連日の過去最安値更新」ーといった、のちの歴史に残りそうな出来事がすでに起こっている。この先についても、油断は禁物であるのかもしれない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

